呉建について

江川義雄

呉建没後五〇年を閲した。本論考は東大医学部内科第二講座から刊行された呉建伝記を主体として、その他の文献を参考、引用し、呉建の人と業績を述べようとしたものである。

呉市出身の呉一族をめぐる優れた医人の輩出はわが国の学者家系の典型と評されているところである。

郷土広島に生まれた芸備医学会、現在は広島医学会に継承されているが、その初代会長は呉秀三で呉建の伯父であり、第二代は永井潜、第三代が呉建である。

呉建は広島に生まれ、活動した人ではないが、呉家は旧藩時代から広島と関係が深く、昭和十五年、芸備医学会第四六年総会の会長として、福山市で「自律神経と疾患」で講演されたのは、逝去一ヵ月前のことであり、次いで富士川游も十一月に逝去され、芸備医学会には忘れ難い総会であった。

家系としては山田黄石—呉黄石—呉文聰—呉建—呉守一と続き、郷土における評伝『広島県先賢伝』には、次のように記載されている。

呉建は安芸・呉の出身である。祖父に呉黄石なる医者があり、叔父に医学博士の呉秀三あり、父は統計学者であったが、医者の家柄であるから、その血統を引いて医に志し、昭和四十年東京帝国大学医科大学を卒業し、東大の助教授となり、さらに九州帝国大学の教授となった。東京帝大に転任し、内科を教授するかたわら、附属病院の医長となり、呉内科として実際の病人の治療に当り、全国より患者が押し寄せて来る有様であった。研究の結果を諸外国の新聞雑誌にも発表していたために、日本に呉建ありとして知られていた。医学の余技として絵をかき、文展に出品して屢々通過し、美術家としても有名であったが、その本職たる医術上の技能優れており、人格もまた高く、人々の尊敬を受けていたが、昭和十五年六月心臓病にかかり死亡した。享年五十八歳。呉建の弟、文炳は『呉文炳先生伝』の中で兄の印象を次のように記している。祖父、黄石も父を

医者にするつもりでいたところ、父が医者になるのを好まず、統計学の方に行ってしまったため、父はこのことを心にとめ、自分の長男を立派に医師に育てあげて、責任に応えた喜びは大きかったに違いない、と。

研究略歴は呉内科同窓会刊行『呉建教授論文目録』にもその概要が記され、『東大百年史』の呉内科（大正十四・五～昭和十五・六）の項では、呉建教授は自律神経に関する研究を遂行、多くの新知見を発表した。随意筋緊張ならびに栄養の神経支配を明らかにし、進行性筋ジストロフィーの成因および治療に関し新知見を加えた。さらに脊髄後根における遠心性脊髄副交感神経を発見し、その機能を明らかにし、生理学、病理学、臨床上に大きな貢献をしたとあり、呉建と一体となり実験研究された沖中重雄は次のように評している。先生は倒れる前日まで動物実験を続けられ、世界的な学者で構想が大きく、業績発表は英文または独文で世界の学会に発表し、日本では昭和十四年に恩賜賞を受けられた。アテネ大学百年祭では、世界の碩学一〇人とともに名誉なドクトルの称号を贈られている。シンシナティー大学の M.H. Fischer は、Ken Kuré の名は Sherrington、Freud、Pavlov に次いで中枢神経生理学の貢献者に加えらるべきであろうと追悼文を寄せ、呉建はまたノーベル賞候補にのぼったことも首肯されるところである。

他の業績としては数百篇の論文、『呉内科』をはじめ著名医学書、数十の随筆、先人の伝記編集、多彩な数百枚の洋画の画業は帝展四回、文展二回となっている。

比較的短命に終った呉建の一生は、自律神経に関する系統的研究に、実験的・臨床的に不休の努力を傾注し、真理発見への挑戦者であるとともに、美を賛美する巡礼者でもあった。

（広島県廿日市市）